

はしがき

近代日本の社会変動を考える時、見過ごすことのできない二つの大きなテーマがある。

一つは、都市と地方との関係である。外来文化はまず都市に輸入され、タイムラグを伴いながら地方へと伝播していく。近代的な工業や会社組織しかり、生活様式や人間関係しかりである。文化が都市から地方へという流れを取るとしたら、逆向きに流れてきたのが、人の動きである。出稼ぎのような一時的なものもあるが、地方から進学や就職で大都市に流出して、そのまま定住していった人たちの数も非常に多かった。日本社会の近代化・現代化は、文化と人の、都市と地方との交流の上に展開してきたといえる。

もう一つは、都市自体の発展——スプロール現象——である。明治維新以降、百数十年の間に、市部居住人口は、国民のマジョリティを占めるに至った（吉川洋『高度成長』読売新聞社、1997年）。東京のような大都市は、常にさらなるモダンへと都市空間を再構成しつつ、周辺部へと居住人口を拡大させてきた。都市近郊鉄道網や道路網の整備は、学校や病院・上下水道等の整備を伴いながら展開し、それ自体が農村部の「都市化」を意味していた。そして、新たに開発された「ベッドタウン」に住まいを定めていった人の大半は、上に述べたような地方から流入してきた人々であった。

こうした二つの大きなテーマを考えた時、地方から都市に流入し、定着していった人々が、どのような人生の歩みを経験されてきたのかを考察することは、近代日本の社会の変化を考えるうえで非常に大きな意味をもっている。われわれは、地方の旧制中学校、工業学校、高等女学校の卒業生の方々の移動に焦点を当てることで、その一端を明らかにしたいと考えた。特に、仕事や家族のあり方のような、人生のさまざまな出来事を統一的な視点におさめるために、ここでは居住地や居住形態の変化を分析の軸とし、それがさまざまなライフイベントとどう関わっていたのかを考察することにした。多種多様で、かけがえのない、一人ひとりの人生を、ある共通のフレームでとらえていくために、「住まい」という側面に光を当てることにしたのである。

研究にあたっては、第一住宅建設協会に助成金をいただいたおかげで、スムーズに研究を進めることができた。また、鶴岡南高校鶴翔同窓会、鶴岡工業高校城端同窓会、鶴岡北高校如松同窓会の方々には、全面的なご協力をいただくとともに、数多くの同窓会関係者の方々にお力添えいただいたおかげで、こういう形で研究成果をまとめることができた。特に、鶴翔同窓会の笹原信一郎さん、桜井文子さん、斎藤勝郎さん、城畔同窓会の秋山太三郎さん、本間仁さん、豊田清さん、上野政紀さん、如松同窓会の宮原祝子さん、横尾真木子さん、佐藤孝さんには、この場を借りてお礼を申し上げたい。

最後になったが、質問紙調査の細かな質問にまで丁寧にお答え下さった各学校の卒業生の皆様方、研究者としてはまだ未熟な大学院生たちを中心にしたインタビューにもかかわらず、快く長時間にわたって聞き取りに応じて下さった卒業生の方々には、研究グループ一同、心から深く感謝したい。

2001年3月20日

（研究グループ代表） 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院教育学研究科 比較教育社会学研究室 広田照幸

電話：03-5841-3943 FAX：03-5841-3918